

■陶磁器・土器から見た多賀城と平安京■

東国経営の政治的・軍事的な要であった多賀城（たがじょう）には、百濟王氏をはじめとする朝廷（ちょうてい）の役人が赴任（ふにん）し、これに伴ってさまざまな畿内の文物・風習が持ち込まれました。

土器では、畿内的なものをアレンジして使用していることが興味深く思われます。

例えば、畿内ではヘラでらせん状の模様を描く暗文（あんもん）と呼ばれる技法が用いられましたが、多賀城ではおなじ模様を墨で描いた例があります。

また、皿の両端を押し返しひだ状とした耳皿（みみざら）は、畿内では釉薬（ゆうやく）をかけた陶器等でみられる器形ですが、多賀城では黒色の器として作られています。

そのほかに、金属器にルーツをもつ稜椀（りょうわん）も、多賀城では好んで用いられました。

畿内の土器でも受容されたものとされなかったものがあり、多賀城での受容のあり方から、間接的に、当時の人びとにとって何が「都的」であったのかを知ることができます。